



「～よりはじめて」という言い方 「より」と 「を」の交替

著者	鍵本 有理
雑誌名	國文學
巻	73
ページ	286-294
発行年	1995-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10112/2423

「より」はじめて「より」といふ言い方

——「より」と「を」の交替——

鍵 本 有 理

はじめに

ある動詞がどのような格助詞と共に用いられるか、特に複数の助詞が相通して用いられる場合、相互の違いを明らかにすることは、文法的な問題として、またさらにその動詞の語義を考える上でも重要であろう。前稿^{註1}では、動詞「出づ」が「より」をとるか「を」をとるか、例えば「家より出づ」と「家を出づ」の相違などについて考察した。即ち、通時的傾向として古くは「より」が多く用いられたが平安末から中世にかけて「を」が多く用いられるようになったことと、「都」「世」「家」など比較的抽象的な性格が強い場所を受ける場合には専ら「を」が用いられ、「よりを出づ」が動作主の意志性が入る、主観的な表現であるのに対し、「より出づ」は無意

志的、客観的あるいは視覚的表現であることなどを述べた。

ところで「出づ」のような移動動詞の他に、いささか性格を異にすると思われる動詞「はじむ」についても、同じように「より」と「を」との交錯が見られるようである。現代語では例えば、

会合には市長をはじめ多くの者が出席した。

この図書館は東京をはじめとする都市の政策に関する資料を所蔵している。

のような言い方をするところがあるが、古代語においては「よりはじめて」「よりをはじめて」の両方が見られる。本稿では古代語を対象に「はじむ」に上接する「より」と「を」の交錯について考えることにする。

まず用例を挙げておく。

I ①左右のおとゝよりはじめてまいり給ぬ。(宇津保・沖つ白波)

②北(の)方よりはじめて、乗りたる人、「物も見じ、かへりな
ん」(落窪 卷二)

③内裏よりはじめてまつりて、御とぶらひのしげき、いとさら
なり(源 若菜上)

④御容貌よりはじめて、飽かぬことなく見ゆる人の御ありさまお
ぼえなり(源 竹河)

⑤まきしめしつとあれば、殿より始め奉りて皆参り給ふ

(紫日記 寛弘五年十一月一日)

⑥敵ノ王^{カミヤ}始^{ヨリ}メ、若干^{ソコバクノイダサ}ノ軍、此^レ聞^チ互^ニ其^ノ頸^ヲ見^ルト

(今昔 卷十ノ三十二)

⑦澄める夜の月に、かぎりなき音を弾きたてたまへるかたちあり
さまざまはじめ、すべて今は世に絶えたるものにて

(とりかへばや 卷四)

⑧衣文のかきやう、烏帽子のためやうよりはじめて、何事も六波
羅様といひてげれば(平家 卷一 禿髪)

II ⑨院の帝の女三の宮をはじめ奉りて、さるべき御子たち……おほ

くの御めしうどまで集め候はせ給ければ(宇津保・俊隆)

⑩乗りたる北(の)方をはじめ、ねたがりまどひて(落窪 卷二)

⑪所々の御とぶらひ、内裏をはじめまつりて、例の作法はか
りにはあらず、いとしげく聞こえたまふ(源 御法)

⑫鏡に見ゆる影をはじめ、人には異なりける身ながら、いはけ
なきほどより(源 御法)

⑬殿をはじめ奉りて攤うち給ふ(紫日記 寛弘五年九月十五日)

⑭大王、始奉^テ若干ノ人、哭悲^キ騒^ガ合^ル事、无限^シ。

(今昔 卷一ノ四)

⑮人がらかたち有さまをはじめ、いとめづらかなる人なれば

(とりかへばや 卷四)

⑯釈迦堂をはじめ、堂々見まはれ共、小督殿に似たる女房だに

見え給はず(平家 卷六 小督)

これらはI II共に「一をはじめとして」と解釈することができる
が、「より」と「を」の使い分けについてはこれまで扱われたこと
がなかったようである。

また源氏物語には次のような異文が見られる。

⑰政所、家司などをはじめ、ことに分ちて

より始て——河内本(紅葉賀)

⑮ 帥よりははじめ、迎への人々、まがまがしう泣き満ちたり

を——陽明本

(須磨)

⑯ ただの人は、大臣をはじめたてまつりて絶句作りたまふ

より——河内本

(少女)

⑰ 朝廷よりははじめたてまつりて、大きなる世のいそぎなり

を——保坂本・国冬本

(藤裏葉)

このように見てきた限りでは「より」と「を」は通用のようにも思われるが、やはり何らかの意味の違いがあるはずである。また現代語では「を」専用であるが、「より」が用いられなくなった理由についても考察する必要がある。

二

まず中古から中世の文献を対象として「より」はじめて(「より」はじめ)を含む、以下同じ「を」はじめて(「同」)の用例数を調べた結果が〈表1〉である。この中には例えば、

⑱ おほいぎみよりはじめて、くはしく問ひ聞き給ひしかば

(落窪 卷一)

⑳ 此ノ會ヲ始メテ、永キ事トス、今ニ不絶ス。

(今昔 卷十二ノ四)

など、「長女から始めて(姫君たちのこと)を」詳しくたずねる」という所謂「起点」を表すものや「目的格」を表すものは当然ながら数に入れていない。

〈表1〉から、大まかに時代的変遷として、平安時代は和文・説話ともに「より」が多く用いられ、また少ない文献からではあるが、院政期以後は「を」が多く用いられているといえそうである。しかし早い時期に「を」が用いられた例もあり、一概にはいえない。そこで試みに天草版平家物語の「より」の例に注目すると、

㉑ 仏御前はかみすがたよりはじめてみめかたち世にすぐれて

(天草版平家・卷二)

のように2例とも上接語が「かみすがた」であり、また竹取物語の「を」の例は、

〈表 1〉

文 献 名	より	を
大 和	1	0
竹 取	0	1
宇 津 保	124	7
落 窪	13	1
源 氏	53	24
紫式部日記	4	3
枕 草 子	8	3
今 昔	73	5
宇 治 拾 遺	13	7
とりかへばや	3	7
覚 一 平 家	7	35
方 丈 記	1	0
天 草 平 家	2	32

〈表 2〉

文 献 名	物 事		人		そ の 他		～を はじめて として
	より	を	より	を	より	を	
大 和	1						
竹 取				1			
宇 津	42	1	79	6	3*		※※
落 窪	10		3	1			
源 氏	29	3	24	18		3	
紫式部日記	1		3	3			
枕 草 子	5	1	2	2			
今 昔	18		55	5			
宇 治 拾 遺	5		8	6			1
とりかへばや	3	5		2			
覚 一 平 家	7	5		22		8	25
方 丈 記			1				
天 草 平 家	2	5		27			11

※ 語義未詳「おほうまくよりはじめ」を含む。

※※ 「～をはじめて」の例が2例ある。

② (かくや姫が) なほ時々はうち嘆き、泣きなどす。(中略) 親
をはじめて、何事とも知らず。

と上接語が「人」である。このようなことから上接語について、

人……(例) 帝・宮・大臣・人名など

物事……(例) 容貌・屏風・(衣の) 色など

その他……動詞の連体形

「是をはじめて」の例

に分けて、どちらの助詞を用いているかを示したものが〈表2〉である。

「よりはじめて」と「をはじめて」との違いについて、凡そ「より」は「人」「物事」両方に使われていたのに対し「を」は「人」に用いられることが多かったという傾向にある。それが時代が下るにつれ、やはり院政期頃から「を」が「物事」にも使われはじめ、優勢となったと思われる。なお現代語で用いられる「よをはじめて」という言い方は、平家物語に多く見られる。

以上のことを参考に「よりはじめて」と「をはじめて」の使い分けの理由を、その語義と助詞の両面から考えてみたい。

三

調査対象とした文献の中で最も時代の新しい天草版平家物語にお

いて、「より」の例は先に述べたように「かみすがたよりはじめて」である。他の作品についても、

㉔ 光いとどまさりたまへるさま容貌よりはじめて飽かぬことなき

を

(源 藤裏葉)

のように「かたち・姿」については「を」は用いられにくいようである。

辞書類には、このような場合に相当する「はじめ」の意味として「第一とする。…を第一として他にまで及ぶ」(『岩波古語』)、「(いくつかの物事を列挙する場合に) 第一とする。主たるものとする」(『小学館古語』)のような説明を与えている。しかし「第一」というても序列があるとは限らず、「容貌」などの場合は、髪や姿という「外見」を例示として使い、外見も、そして「人格・人柄」も優れていることを表現すると思われる。

㉕ 朔日の御装束、色よりはじめて、いと清らにし出で給へれば

(落窪 卷二)

㉖ 屏風、壁代よりはじめ、新しく払ひしつらはれたり

(源 若葉上)

も同様で、「色」「屏風」を例として他の全ての物を類推させるのである。つまりどちらかといえば同程度の物事を列挙する場合の例示としての性格が強い、といえる。

それに対して「しをはじめて」の方は、まず、

㉗ 帝をはじめたてまつりて、恋ひきこゆるをりふし多かり

(源 須磨)

㉘ 関白殿を始め奉て、太政大臣已下の公卿殿上人、四十三人が官職をとめて追籠らる

(平家 卷三 大臣流罪)

など、身分として第一であることを示す場合に使われ、またその場合は「はじめ奉る」など敬語の補助動詞を伴って使われることが多い。またあるいは話の展開上最も関わりのある人物を挙げる場合に使われる。

㉙ (七日夜の御産養に) 父大殿をはじめて、左の官人、宮人引きて輦打ちてに(四字努力)たなる夜一夜遊び明かす

(宇津保 国譲上)

㉚ (帝釈が留志長者に化して) 蔵どもをあけさせて、妻子をはじめて、従者ども、それならぬよその人々も……宝物どもをとりだして、くばりとらせければ

(宇治拾遺 卷六ノ三)

㉛ の竹取物語の例もこの場合に含められよう。

さらに、天皇に関係する物や場所を第一の例として挙げる場合に「を」が使われている。

㉜ 九重の御殿の上をはじめて、言ひしらぬ民のすみかまで

(枕 三七段 節は)

㉝ 御所の御舟をはじめまいらせて、人々の舟どもみないだしつ、

そこで「を」が用いられるのは、高い程度のもの、重要なものを例として挙げる場合であることが多い、といえそうである。

以上の観点から用例を整理してみると、同一人物に「より」と「を」の両方が使われている場合、例えば、

③④殿よりはじめ奉りて、公達、四位五位ども、おほく来騒ぎて

(紫日記 寛弘五年九月十日)

⑤殿をはじめ奉りて攤うち給ふ (二例) ⑬ 同 九月十五日

があるが、「より」と「を」の使い分けがなされていると考えられないだろうか。すなわち③④は沢山の人が集まって騒ぎ、座敷が乱れるほどであったという場面であり、殿^二道長はその大勢の一人であるのにすぎないが、⑤は殿の御産養の日であり、主人である道長も攤を打っている、と道長を取り立てているのである。

枕草子の例、

⑥御前よりはじめて、紅梅の濃き薄き織物、固紋無紋などを、ある限着たれば、ただ光り滴ちて見ゆ(枕 二六二段 関白殿)

⑦かけまくもかしこき御前をはじめ奉りて、上達部、殿上人、五位、四位はさらにも言はず、見ぬ人はすくなくこそあらめ

(同 二二段 生ひ先なく)

も同様であろう。

そこで以上をまとめると、

同程度の物事を列挙する(語り手がそのような扱いをしている)場合に「より」が使われ、高い程度のもの・重要なものを例示し、低い程度のものにまで及ぶ場合は「を」が用いられる傾向にあるといえる。

さらに助詞の働きから考えてみると、「を」の格機能確立については諸説があるが、元来「を」は感動を表し、また情意や動作の対象、確認の気持ちを表すものであるといわれる。一方「より」は、現代では「から」などの助詞にとって代わられ、比較の基準を表すなどの用法に限られているが、古くは広く動作の起点を表していた。

そこで「よをはじめて」の方はその人物や物事を序列の第一のものとして取り立てる、語り手の主観が加わるものであり、また「よはもちろんのこと」と判断し抽象的に表現するものであるのに対し、「よよりはじめて」は客観的に物事を列挙する、あるいは居並ぶ人物などを視覚的にとらえた場合の表現である、という違いが生じたのではないか。このことは「よより出づ」と「よを出づ」との表現の違いと同じ傾向のものとして一括することができよう。

また、通時的に宇津保物語や落窪物語など比較的に年代の古い資料では「より」が多用され、後のものについては「を」が増加する傾向にあることも「出づ」と同様であるが、他の助詞についても同

様の事実が指摘されている。

例えば飯倉篤義は「おなじ」という語が、「いにおなじ」と「に」をとっていたのが、院政期頃から「いとおなじ」と「と」を用いた例が現れ、後に「いとおなじ」のかたが普通になったことについて、

もとある事物が「不変にして同一である」ことを意味した「おなじ」という語が、二つの事物が「対等にして同種である」ことを意味する方向へと意味変化（意味の拡大）をとげたことをしめすものであって、もちいられる格助詞が修飾的な「に」から、判断的な「と」へ変じたのも、そういう「おなじ」という語の意味変化の結果であると解される。

と述べている。また「そむく」の語は、上代では「いそむく」であったが、中古に「に」が用いられ始め、後には「いそむく」が優勢となった。その理由の一つに語義の面において、「そむく」が原義である「背を向ける」という動作性を失い、主体の精神的な作用を示すようになったことがあり、その結果、動作の帰着点を表す「に」をとるようになったことが既に指摘されている。

このような例と考え合わせると、助詞が交替した現象を、動詞などの語義の変化と、助詞の用法の両面から考える必要があるが、古代語から近代語への変化の特徴の一つとされる、感性的表現から論

理的表現へ、ひいては抽象的思考へといった変遷の一つの表れとしてとらえることができるのではないだろうか。そして「はじむ」の場合は「判断」を明示するものとして後に「いをはじめとして」という言い方が現れるに至ったのではないか。他の語の例も合わせて今後検討すべきであろう。

四

最後に、上代文献に見られる「いをはじめて」「いよりはじめて」の例を見ておきたい。

まず万葉集には、

③⑧……逢はしたる今日をはじめて（今日乎波自米氏）鏡なすかく

し常見む……

（18・四二一六 長歌）

③⑨をみなへし秋萩交じる蘆城の野今日をはじめて（今日乎始而）

万代に見む

（8・一五三〇）

の2例があるが、これらは「今日を最初として後も」という意味で、「今日」を始点とする時間についての表現であり、これまで述べてきた用例とは区別されるものである。

統紀宣命にも、

④⑩天降坐ま天皇御世乎始而

（四詔 和銅元年正月乙巳 元明天皇）

④天降坐之天皇御世¹始^天

(十三詔 天平勝宝元年四月初 聖武天皇)

および、訓み添えだがこれに準ずると思われる、

④天降坐之天皇御世¹始^而

(六詔 天平元年八月癸亥 聖武天皇)

の3例が見られ、やはり「御世」と時間を表すものである。

そして祝詞には、

④天下四方¹、自¹今日¹始¹罪¹云¹罪¹不¹在¹

(六月晦大赦)

④自¹康¹治¹元¹年¹始¹、與¹天¹地¹月¹日¹共¹、照¹明¹御¹坐¹事¹

(中臣壽詞)

など3例、時間に関して「より」が使われているのが興味深い。その他は、

④皇¹神¹御¹刀¹代¹始¹、親¹王¹等¹・王¹等¹・臣¹等¹・天¹下¹公¹民¹取¹作¹奥¹都¹

御¹歳¹者¹ (広瀬大忌祭)

④天¹下¹乃¹公¹民¹乃¹作¹作物¹者¹、五¹穀¹始¹、草¹片¹葉¹至¹

(龍田風神祭)

④皇¹御¹孫¹之¹命¹乃¹朝¹庭¹始¹、天¹下¹四¹方¹國¹、罪¹止¹云¹罪¹不¹在¹

(六月晦大赦)

など「〜をはじめて」の例が5例見られる。「を」が優勢である点、

中古の場合と矛盾するため問題が残るが、上接語の「すめかみのみ

としろ」「みかど」などは天皇に関するものであり、後世と共通す

るところもある。また口誦されたものであることも考慮する必要が

あろう。

なお古事記には、

④大¹后¹始¹而¹、諸¹卿¹等¹、因¹堅¹奏¹而¹、

④大¹御¹刀¹及¹弓¹矢¹始¹而¹、脱¹百¹官¹人¹等¹所¹服¹衣¹服¹以¹拜¹献¹ (記雄略)

があり、他の上代の用例からしてそれぞれ「大后をはじめて」「大

御刀及弓矢を始めて」と訓むのが適当と思われる。但し、④を思想

大系本では「大御刀ト弓矢及始メ而」と訓んでいる。また、

④金¹銀¹為¹本¹、目¹之¹炎¹耀¹、種¹種¹珍¹宝¹、多¹在¹其¹國¹ (記仲哀)

は「金銀を本と為て」「(古典文学大系本)「金・銀を本と為て」(思

想大系本)などの訓が行われているが、中古の用例の少なさから

「〜をはじめとして」と訓むには疑問が残る。

以上「を」と「より」の交錯について「はじめて」につづく例を

検討したが、このような助詞の使い分けについて、古代語を対象に

考察することは、現代語の用法のみならず上代文献の訓読を考える

上でも参考となろう。他の助詞でも例えば古事記において、前述し

た「そむく」の語について、

⑤百¹官¹及¹天¹下¹人¹等¹、背¹輕¹太¹子¹而¹ (記允恭)

を宣長の古訓以来「輕の太子に背きて」と訓んでいたが、思想大系本が「を背きて」と改めているなど、訓みの面からも注意を払うべき問題であろう。

〈注〉

(1) 拙稿「『より出づ』と『を出づ』」(関西大学『国文学』70、平成5年12月)

(2) 使用した索引類を以下に挙げる。なお用例の表記については私意によって改めたものもある。

- 大和物語語彙索引(塚原鉄雄他) 竹取物語総索引(山田忠雄) 九本対照竹取翁物語語彙索引(上坂信男) 宇津保物語本文と索引(宇津保物語研究会) 落窪物語語彙索引(松尾聰・江口正弘) 源氏物語大成(池田亀鑑) 紫式部日記用語索引改訂増補(佐伯梅友他) 枕草子総索引(松村博司) 今昔物語集自立語索引(馬淵和夫他) 宇治拾遺物語総索引(増田繁夫他) とりかへばや物語総索引(鈴木弘道) 平家物語総索引(金田一春彦他) 広本略本方丈記総索引(青木伶子) 天草版平家物語総索引(近藤政美他)

源氏物語の異文の確認された4例の処理については問題もあろう

うが、ここでは青表紙本の本文に依拠し、「より」2例「を」2例として数値に入れてある。

(3) 「語彙史の方法」(『講座国語史3 語彙史』昭和46年9月大修館書店 19頁)。

他に「〜とみえる」「〜にみえる」についても、「〜にみえる」の「みえる」は視覚活動のとらえた「客観」を表現しているのに対し、「〜とみえる」の「みえる」は「おもわれる」という主観の表現に近く、「と」の前にはつねに判断があるという指摘(国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字(3)』昭和37年9月 秀英出版、135頁)もある。

(4) 信太知子「『をそむく』から『にそむく』へ——動作の対象を示す格表示の交替——」(『国語語彙史の研究 二』昭和56年5月 和泉書院)。

(5) 『古事記総索引』によるともう一例、
是以百官及天下人等、
(記允恭)

が見出されるが、訓に諸説があり、ここでは取り上げないことにした。

(6) 思想大系本巻末の解説「古事記訓読について」の中で小林芳規は西大寺本金光明最勝王經古点において「背く」が皆「を」としていることから「を背く」と訓むべきことを指摘している。